
Flmから始まる。(仮)

Qnola

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Filmから始まる。(仮)

【Nコード】

N5415Y

【作者名】

Qnola

【あらすじ】

自分を上手く表現できない女“若葉”と心から笑えない男“日向”
そんな二人が出会う時、変わりたいと願う心が通う時、二人の人生
を変える出来事が起こる？

第一章 暖色の明かり

毎朝6：29に起床。趣味は特にナシ。彼氏…もちろんナシ。好きな食べ物…それもナシ。

別にこれといって楽しいこともなく淡々と過ぎる毎日に
何の意味があるんだろう?と思いつながらまた一日が過ぎていく。

「若葉ちゃん、今日はもういいわ。ありがとう」

「…あ、はい。お疲れ様です。」

笑顔がかわいいおばちゃん(オーナー)に声をかけられて私の一日の仕事が終わる

どんな仕事かと言うと、いわゆる昔ながらの喫茶店。

街の中心にはあるものの、華やかなお店が立ち並ぶ表通りではなく細い路地を抜けた裏側にある隠れ家的なお店だからか
お客はいつも変わらず常連客のみ。

楽かと聞かれれば楽だし、お給料もそれなりにいい。

お店で出す料理も飲み物も、その辺にあるチェーン店よりは数段美味しい。

なのに……流行らないのがたまにキズ

「あ、そうだ若菜ちゃん、今日はこのあと時間あるかしら？
少し会わせたい人がいるのよ。」

「会わせたい…人、ですか？」

「ええ。甲斐さんて言う男の方なんだけどね、ほら…この間いらっ
しゃった

黒いコート着た背の高い人よ。」

そう言われて先週のことを思い出した。

「ああ、この間来てた新規のお客さんですね。」

「そうそう。その方がね、このお店を買い取りたいって言うてるの。」

“買い取り”ってことは、このお店は潰れるってことなんだろう。
そんな事を考えながら目の前にある煙草を手に取り静かに火を付けた

「いいですよ。でも、おばちゃんはそれでいいんですか？
」のお店長くちやってくるのだ。」

部屋の片隅に出来た大きな蜘蛛の巣を見ながら
肺にためた煙を大きく吐き出した。

「まあ……。若葉ちゃんてば、そんな寂しそうな顔して。

このお店のまま、買い取っていただけるそうなのよ。」

「このお店のまま？」

「そうよ。なんでもその方、一度うちに来てくださった時に
大層気に入ったみたいだね。」

シワだらけの顔をくしゃくしゃにして嬉しそうに笑うおばちゃんは
その時のことを優しい顔で話してくれた。

。

「いらっしやいませ、外は寒かったですでしょう？
どうぞその暖炉の前の席へどうぞ。」

いつものようにおばちゃんがお客を席へと案内する。

その日は曇りで12月になってすぐの寒い日だった。
普段常連しか来ない店に、厚手の黒いコートを羽織った男の人が訪れた

「ご注文はお決まりになりましたか？」

「じゃあ、アメリカンで。」

「はい。じゃあすぐお持ちしますね。」

聞いた注文をおばちゃんに伝えるために私はカウンターへと向かった

「アメリカンお願いします。」

「はいな。……あ、若葉ちゃん。これ先にあのお客さんに持っていつてあげてね」

トレイに乗せてあったのは、自家製のクッキーと生チョコでおばちゃんが趣味でお客さんに出してる冬季限定バージョン。

「あ、あと暖炉に薪が少なくなってるからそれもお願いでいいかしら。」

「分かりました。ちょっと多めに入れておきますね。」

「ええ、お願い。」

優しく微笑むおばちゃんを見て、私もつられて笑ってしまった

「失礼します。先にこちらをお召し上がりになってお待ちください。
もうすぐコーヒーの方をお持ちしますので」

「ありがとうございます。」

コクンと頷いたその男の人は、持参していた小説を読んで静かに溜め息をついていた。

「…っ。くしゅんっ。」

暖炉の火が弱まって、店の中が少し肌寒い。
急ぎ足で薪を取りに行くと、暖かい光を放つ暖炉の前にかがんだ。

持ってきた薪を暖炉にくべると弱まりかけていた火がパチパチと音を立てて大きくなる。

店内に心地よく響く音楽と、ほのかに香るコーヒー豆の匂い。

そして店の片隅で静かに時を刻む大時計の針の音はこの街に来たばかりの事を思い出させた。

- 。

このフルム街にきたのは、高校を卒業してすぐだった。

それまで、小さい頃に両親を事故でなくした私は、母方の遠い親戚の家に渋々引き取られ腫れ物に触れるような扱いをされて育ってきた。

必死にアルバイトをしてお金を貯め、いつかこの家を出ることだけを考え必死に働いた学生生活。

正直、その頃にいい思い出とかある訳もなくて。

高校を卒業して程なく、フルム街で見つけた1DKのアパート。

フルム街はラグナと呼ばれる地域の一つで、他にもシエルム街・ブレア街・ラウル街などいくつもの街で構成されている。

一番治安もよく、物価も安いフルム街は人気もあって一人暮らしをするにはとてもいい街だと思った。

念願だったあの家を出る時はまるで、長い間鳥籠に閉じ込められていた小鳥が青くて広い空に飛び立つような素晴らしい気分です。

俯きがちだった自分が少し、前を向けたような気がした瞬間だった。

：

フルム街へ越して早1ヶ月が過ぎ、いつものように夕飯の材料を買った帰り道
ふと空を見上げると、分厚い雲が日の沈みかけた空を覆いつくしていた。

「明日は雨…か。」

雨は、嫌いだ。

だって昔の嫌な思い出が蘇ってくるから。

物心ついた頃から引つ込み思案だった私は、人と関わる事が極端に苦手だ

友達と呼べる人すらいなかった。

今思えば、卑屈になっているだけなのかもしれない。

でも、うさぎとは違って人は、寂しくても死ぬことはない。

誰かと深く関わって傷つく事はあっても、自分と言う人間を理解されることはない。

私がまだ小さかった頃、その日雨が降る中、両親と3人で手を繋いで横断歩道を歩いていていた。

お母さんは赤い傘、お父さんは青い傘、そして私は、黄色い傘。

両親の温かい手のぬくもりが私の両手を包み込んでくれていた筈なのに。

信号を無視して飛び込んできたのは一台のトラックだった。

横断歩道の白い部分を踏んで渡っていた私を両親がとっさに側道へ押し出し

起き上がった私が目にしたのは、降り注ぐ雨によって道路いっぱい広がる血の海。

赤と青の傘は跡形もなく壊れ、目が合ったのは何も言わなくなった

お母さんとお父さんの顔だった。

今でも夢に見るくらい嫌な血の色、鉄の匂い。

「…さっさと帰る。」

過去を振り払うように足早に細い路地を進んでいると
うつすらと暗い場所へ着いた。

「ここって…裏通り？」

引越してきてから華やかな表通りしか見ていなかった私にとって
日の当たりが悪い裏通りはどこか少し不気味で別の世界にも見えた。

「どつしよつ、道間違えたのかな。
早く帰らないと雨も降りそうだし」

そう言って空を見上げると、今にも雨が降り出しそうなほど雲が淀んでいる。

古いレンガ造りの建物が立ち並び
時々どこから暖炉にくべる薪の匂いがかすかに香ってくる。

すると、ポツポツとついに雨が降り出してしまった。

「最悪だ。ほんと」

傘を持っていないのに雨は一向に強さを増していく。
近くの建物へと非難してみたものの、雨はしばらく止みそうにない

「…。」

「雨止みませんね」

ふと後ろから声がして振り返ってみると、そこには茶色い紙袋を抱えた小柄な女性が困った顔をして立っていた。

「よかったら、うちこの上の喫茶店なんだけど寄っていきませんか？」

「え、あのー…」

「この雨しばらく止みそうにないし、風も強くなってきたから

よければ雨宿りにございませぬ。」

そう言ってニッコリ微笑むと女性が階段を上りながら手招きをした。

「すみません、それじゃあ少しだけお邪魔します。」

「どうぞどうぞ。」

あ、あなたコーヒーか紅茶ならどっちが好きかしら？」

「どっちも好き、ですけど…」

「ほんと？じゃあうちの自慢のコーヒー淹れるから飲んでって」

建物の3階まで上がると女性はc a f e f i l m と書かれたドアの鍵を開け

“好きな所に座ってて”とそのまま茶色い紙袋を抱えて扉の奥へと消えてしまった。

「雨、止まないな」

窓の外で振り続ける雨を見ながらポツリと呟く。
すっかり濡れてしまった買った買い物袋を隣に置いて、濡れた肩をハンカチで拭いた。

すると、先程の小柄な女性が挽きたてのコーヒー豆を抱えて持ってきた。

店の中にふんわりと濃い豆のいい香りが漂う

「あなたお名前は？」

着々とコーヒーを淹れる準備をしながら微笑む

「若葉…月島若葉と言います。」

「そう、若葉ちゃん。」

私はこの店のオーナーで椎名ルミって言うの、よろしくね。」

「あ、はい。」

笑った顔はすごく優しそうで、まだ小さかった頃に見たお母さんの顔と

少し似ている気がした。

「若葉ちゃんは学生さんか何かかしら？」

「いえ、フリーターみたいなものです。」

私が困ったように眉を下げると同時に、出来立てのコーヒーが目の前に置かれた。

「お家はこの辺り？」

「ええ。表通りのほうですが、ここからは近いです」

「そうなの、それじゃあお仕事もこの辺りで？」

「あ、いえ。引っ越してきたばかりでまだ仕事は…」

少し気まずそうに答えると、椎名さんはニッコリ笑ってこっちを見た

「なら、このお店で働かない？」

あんまり忙しくはないけど、最近歳のせいか動きが鈍くなっちゃつて。」

そう言って恥ずかしそうに笑いながら

腰をポンポンとたたいている姿を見て、つられて私も少し笑ってしまった。

あまり愛想がいい方じゃない私に、この街に来て初めて優しく接してくれたのが

この椎名さんだった。

「私でよければ、お願いします」

そしてこの日を境に私は c a f e f i l m で働くことになった。

あれから3年が過ぎ、始めは“椎名さん”と呼んでいた私も
子供のよつに可愛がってくれる椎名さんを“おばちゃん”と呼ぶよ
うになっていった。

。

パチパチ…

暖炉の火が薪を燃やし、肌寒かった店内がどんどん暖かくなっていく
チリン、と鳴ったカウンターからの鈴の音で私は暖炉の前を後にし
た。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5415y/>

Flmから始まる。(仮)

2011年11月17日23時38分発行